

2023年9月17日
宮崎中部教会
牧師 乾元美

申命記 10 : 20～22

マタイによる福音書 5 : 33～37

「誠実・真実のための誓い」(第三戒②)

(ハイデルベルク信仰問答 十戒について 問 101～102)

※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【招詞】詩編 33 : 1～5

【讚美歌】27「父、子、聖霊の」

【詩編交読】詩編 38 編

【赦しの宣言】イザヤ書 55 : 7「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。
わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讚美歌】204「よろこびの日よ」

【祈祷】

【聖書】申命記 10 : 20～22、マタイによる福音書 5 : 33～37

【説教】「誠実・真実のための誓い」

<第三戒>

わたしたちの礼拝では、『ハイデルベルク信仰問答』という信仰の学びの本を用いて、毎週聖書の御言葉を聞いています。

今はちょうど「十戒について」というところに入りました。「十戒」とは、十の戒め、と書きます。戒め、とありますけれども、これは教会において、この戒めを守れないと失格だ、とか、これをしないと救われない、とか、そういうものではありません。

「十戒」とは、すでに神さまに救っていただいた者が、その神さまの恵みに感謝しつつ、神さまに喜ばれる生活を送るための「道しるべ」、「指針」として与えられたものです。

先週は、その「十戒」の三番目の戒め、「第三戒 あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」というところでした。

この、主の名をみだりに唱えてはならない、というのは、神さまのお名前を一切口にしてはいけない、という戒めではありません。

主の名をみだりに唱える、とは、神さまのお名前を、乱用すること。分を弁えずに、自分のために神さまを利用しようとすることです。第三戒は、そのことを禁じる戒めでした。

そして、むしろこの第三戒が教える積極的な意味は、神さまのお名前を正しく呼ぶこと。心をこめて、信頼をもって、神さまのお名前を呼ぶ、ということだったのです。

そして今日は、その第三戒をもう一回やります。『ハイデルベルク信仰問答』は、この第三戒についてはさらに問答を重ねて、「誓い、誓約」について述べているのです。

それは、わたしたちが、「誓う」という行為において、もっとも「主の名をみだりに唱えてはならない」という戒めを、破りやすいから。罪を犯しやすいからです。

<一切誓ってはならない？>

今日読まれた、新約聖書のマタイによる福音書は、イエスさまが、その「誓い」について語っておられるところです。この箇所は、「十戒」の「第三戒」と深く関わっています。

5:34 のところでイエスさまは、こう言われました。「しかし、わたしは言うておく。一切誓いを立ててはならない」。

…でも、実際わたしたちは今日も、とても大切な場面で、誓ったり誓約をしたりしています。教会であれば、洗礼を受ける時。牧師や長老が就任する時。それに結婚式などです。

また、日本の社会の中でも、神さまのお名前を言うことはありませんが、裁判所で証人として立つ時には、宣誓をして、良心に従って真実を述べ、偽りを言いません、ということ、誓わなければなりません。

ですから、『ハイデルベルク信仰問答』は問 101 で、「神の御名によって敬虔に誓うことはよいのですか」と問い、「そのとおりです」と答えています。

それには、二つの場合があげられていて、一つは「権威者が国民にそれを求める場合」。つまり先ほどの裁判所のように、社会の秩序を保つために必要な場面です。そして、もう一つは「神の栄光と隣人の救いのために、誠実と真実とを保ち促進する必要がある場合」です。

『ハイデルベルク信仰問答』が、これほど詳細に「誓い」のことを語るのは、宗教改革の時代に、このイエスさまの「一切誓いを立ててはならない」との御言葉を、額面通り受け取って、いかなる場面でも、どんな誓いもするべきではない、と主張する人々がいたからです。

でも、「主の名をみだりに唱えてはならない」という戒めが、一切、主の名を口に出してはならない、という意味ではなかったように。わたしたちは、この第三戒と、イエスさまの「一切誓いを立ててはならない」という御言葉が、本当に求めていることを、きちんと聞き取らなければならないのです。

<偽りの誓いと真実な言葉>

さて、イエスさまは、「一切誓いを立ててはならない」ということについて、どのようにおっしゃったのでしょうか。

33、34 節にはこうありました。「また、あなたがたも聞いているとおり、昔の人は、『偽りの誓いを立てるな。主に対して誓ったことは、必ず果たせ』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。一切誓いを立ててはならない。」

イエスさまの時代のユダヤ人たちは、祖先であるイスラエルの民に与えられた、旧約聖書の戒めを、ずっと守り続けていました。

その中で、「十戒」はもちろん中心的な戒めですし、イエスさまが仰った「偽りの誓いを立てるな。主に対して誓ったことは、必ず果たせ」という戒めもあったのです。

「偽りの誓いを立てるな」。神さまの名において誓ったこと、神さまに対して誓ったことに、偽りがあってはなりません。守れないようなことを、誓ってはなりません。

また、神さまに対して誓ったのであれば、それは必ず果たされなければなりません。誓いには当然、それを守り、実行する責任が伴うのです。

しかし、イスラエルの人々は、第三戒の「主の名をみだりに唱えてはならない」という戒めを厳密に守るために、主の名を誓いに用いること自体を、避けるようになりました。

そしてやがて、主の名の代わりに、別のものを持ち出して、それに誓うようになったのです。それが、イエスさまが指摘されたように、天であったり、地であったり、エルサレムであったり、自分の頭であったりしたのです。

最初は、神さまのお名前によって誓うことに、畏れを感じたからだったかも知れません。

しかし、これはやがて、責任逃れの言い訳になっていきました。確かに誓ったけれども、わたしが誓ったのは「天」にであって、神さま御自身に誓ったんじゃない。だから、破ってしまったけれども、そんなに罪は大きくない、と。

…そもそも、人はどうして誓わなければならないのでしょうか。

誓い、誓約とは、人と人との関係における、とても大事な場面で、その語られた言葉が真実であると、保証することです。あるいは、そこで交わされた言葉を、将来にわたって必ず守るという約束です。

でもそれは、ひっくり返せば、そのような保証や、約束を必要とするほど、人の言葉は信用できない、ということではないのでしょうか。人の心は変わりやすく、曖昧で、偽りに満ちています。だから、そのように誓いを立てて、言葉が本当であることを、何か別のもので保証することが必要になるのではないのでしょうか。

人間の言葉は、わたしたちの言葉は、罪に捕らわれていて、誠実さに欠けているのです。常に真実を語るができないのです。

だから人は、神の名を持ち出して、誓ったり誓わせたりするのではないのでしょうか。

自分よりも偉大な方を持ち出して、この方の権威で、自分の弱々しい言葉に権威付けをします。天にかけたり、地にかけたり、エルサレムにかけたりすることも、根本的には同じです。

ですから、イエスさまは、天にかけるのも、地にかけるのも、エルサレムにかけるのも。その心根は、自分の偽りの言葉のために、自分の信用を得るために、神さまのお名前を利用しているのと同じことだ、と言われるのです。

それに、天も、地も、エルサレムも、すべては神さまのものです。だから、神さまのお名前ではないからと言って、誓いに誠実でなくてもいい、という理由にはなりません。

また、イエスさまは、言われます。あなたが自分の頭に誓ったとて、あなたはその髪の毛一本どうすることも出来ないではないか。髪の毛も、あなたの頭も、あなた自身も、神のものではないか、と。

だから、あなたが、心から真実を語ろうとしないなら、あなたが心から自分の言葉に誠実であろうとしないなら、もはや、一切誓うな。そう言われたのです。

イエスさまは、37節で「あなたがたは、『然り、然り』『否、否』と言いなさい」と言われました。

それは、「然り」に対して「然り」と言う。「否」に対して「否」という。ただ真実だけを口にする。誠実な言葉だけを口にする、ということです。

そうであるならば、責任逃れを考えながら誓うことなど、まったく必要ないのです。

イエスさまが、「一切誓いを立ててはならない」と言われたのは、わたしたちの言葉が、わたしたちの心が、いつも神さまの御前で、真実であり、誠実であるように、ということなのです。

<敬虔な誓い>

でも、わたしたちはこう聞くと、もう何も言えなくなってしまいそうです。

わたしたちは、自分の言葉の不誠実さ、自分の心の弱さを、よく知っているのではないのでしょうか。自分を守るための偽りの言葉。体裁だけを整える、見せかけの誓い。後から、とりつくろったり、言い訳をしたり、責任を逃れようとするつまらない言葉。わたしたちの口からは、心からは、そんな言葉がぽんぽん出てくるのです。

でも、だからこそ今、わたしたちは、神さまの御名によって敬虔に誓う者となるように。神さまの御前で、誠実な、真実な言葉を語る者になるようにと、招かれているのです。

今日読まれた申命記 10：20 にも、「あなたの神、主を畏れ、主に仕え、主につき従ってその御名によって誓いなさい。この方こそ、あなたの賛美、あなたの神であり、あなたの目撃したこれらの大いなる恐るべきことをあなたのために行われた方である」とあります。

わたしたちは、他のものではなく、ただ神さまの御名によって誓います。それは、この方だけが、わたしたちを創造し、罪から救い、生かしてくださる、大いなる恐るべきことを行われる、まことの神であり、まことに真実な方であり、まことに誠実な方だからです。

ですから、神さまの名によって誓うというのは、ただこの方のみを、まことの神さまとする、ということに他なりません。

そしてそれは、もしわたしたちが、この神さまの御前で偽りを語ったり、誓いを破ることがあったなら、この方が、すべてを明らかになさり、この方が、わたしをお裁きになることを受け入れる、ということなのです。

すべて真実をご存知であられ、またわたしたちを正しく裁くことがお出来になるのは、まことの神さま、ただお一人だけだからです。

だからわたしたちは、他の者や、聖人や、被造物によって誓うことはしないのです。

…神の名によって誓うことは、神さまの御前に立つということです。

でも本当は、わたしたちは、いつも普段から、毎日、神さまの御前に立って生きています。神さまの御前で、言葉を語っています。神さまの御前で、隣人と共に歩んでいます。わたしたちは、神さまの御前に立っていることを、はっきり意識して、恐れ敬って、敬虔をもって、言葉を語り、歩まなければならないのです。

<愛と赦しの中で>

でもそれは、いつも恐ろしい裁きの目で、神さまに見張られている、ということではありません。そうであるなら、それこそわたしたちは恐ろしくて、ひと言も話せなくなるでしょう。

わたしたちは、誓った時には、本当に心からの誠実な誓いであつたけれども。心から出た、まことの言葉であつたけれども。やはり弱さによって、罪によって、そのことを果たせなくなってしまう、ということがあるかも知れません。

もちろん、神さまの御名によってなされた誓いは、決して軽んじられてはなりません。

でも、わたしたちが、神さまの御前で誓ったことに対して、語ったことに対して、自分の力で、このことを守り通さなければならない、失敗したら一貫の終わりだ、滅ぼされるしかない、そんな風に考えているなら、それはとても苦しいことです。

…神さまの眼差しは、わたしたちの過ちを一つも逃すまい、見つけたら決して許すまい、という眼差しではありません。

今日のマタイによる福音書の 5 : 36 で、イエスさまは「髪の毛一本すら、あなたは白くも黒くもできない」と言っておられました。まったく、自分の小さなことすら、どうすることも出来ない、無力な、弱いわたしたちです。

でも、この後のマタイによる福音書の 10 : 29~31 には、イエスさまが、こう言って下さる箇所があります。「二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている」。

わたしたちが、自分でどうすることもできない髪の毛一本を、天の父なる神さまは、一本も取りこぼすことなく、数えておられるというのです。

それは、父なる神さまが、わたしの髪の毛一本残見落とすまいとするほどに、わたしのどのようなことをも心にかけて下さっている。髪の毛一本でさえも、その御手において守って下さるほどの慈しみをもって、わたしたちのことを愛してくださっている、ということです。だから、恐れるな。そう言われています。

父なる神さまの眼差しは、愛の眼差しです。

だからこそ、わたしたちが裁かれるべき罪は、もうすでに、神の御子イエスさまが、その十字架の苦しみと死によって、すべて引き受けて下さいました。

わたしたちが自分ではどうしようもない弱さも、偽りも、不誠実さも、あらゆる罪も、イエスさまはすべてご自分の背に、ご自分の十字架に、担い切って下さいました。

ですから、わたしたちが、神さまの御前に立つとき。それは、裁きの法廷に立つのではなく、愛と赦しの、あたたかい抱擁の中に立っているのです。

わたしたちは、すべてを赦された、その恵みの中で、神さまの愛の中で、誠実に生きなさい、真実を語りなさいと、促されているのです。

ですからわたしたちは、もう弱い自分を、不誠実な自分を、嘘で隠したり、偽りの誓いで覆ったり、ごまかしたりすることで、守らなくてよいのです。むしろ、そのように自分を守ろうとすることで、これまでどれだけ隣人を傷つけたり、あるいは傷つけられたりしてきたでしょうか。

しかし、イエスさまの救いの御業が成し遂げられた今や、わたしたちは、そのような罪の自分を、神さまの御前に投げ出します。そして、大いなる父なる神さまの御手によって、守っていただく。

だからわたしたちは、この世にあって、ごまかしたりせず、自分を守るために、偽ったり、正当化したりせず、はっきりと真実を語っていくことができる。誠実に生きていくことができるのです。

わたしたちが、そのような心からの思いで、神さまの名を呼んで、誓うなら。神さまの名の許で、心から真実の言葉を語ろうとするなら。

わたしたちに対して、どこまでも誠実でいてくださる神さまは、喜んでわたしたちの言葉を受け取ってくださり、御前に差し出したわたしの心を、正しい道へと導いて下さり、真実なものとして下さるに違いありません。

自分の弱さや、罪や、不誠実さを、わたしたちはよく知っています。

でも、さらにわたしたちは、そんなわたしが、神さまに愛されていること。すでに神さまに罪を赦されていることを、イエスさまの十字架と復活によって知らされているのです。

ですからわたしたちは、罪の赦しを与えられた今や、ひと言も誓えなくなったり、何も言えなくなるのではなく。むしろ、これからは、神さまの栄光を現わす、賛美の言葉。信仰を告白する言葉。また、隣人の救いのために、相手を生かす、相手を愛する、誠実で、真実な言葉を、語っていくことが出来るのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちの口から、心から出る、自分勝手な罪深い言葉を、お赦してください。

わたしたちは、あなたの愛によって、あなたの真実によって、イエスさまの十字架と復活を与えられ、罪の赦しを与えられ、罪を覆っていただきました。

どうか、あなたの愛に、恵みに、わたしたちへの誠実さにお応えして、わたしたちもあなたの御前で、真実な言葉を語り、また誠実な者として歩むことが出来るように、支え、導いてください。

わたしたちの口の言葉が、御旨に適い、心の思いが、御前に置かれますように。

そして、あなたを愛し賛美する言葉、隣人を生かし慰める言葉を、語る者としてください。

このお祈りを主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 61 「われらは信ず」

【信仰告白】 ニカイア信条

【十戒】

【献金】 65-1 「今そなえる」

【主の祈り】

【祈祷】

【讃美歌】 28 「み栄あれや」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン